

PARNASSIUS

No. 50

目 次

洲本市安乎町の蝶類とその変遷	堀田 久	1
メンガタメクラガメの採集記録	堀田 久	5
「淡路花博」における害虫進入警戒調査に関わって	藤富正昭	6
イシガケチョウの思い出	梅本晃義	8
コムラサキの採集記録	梅本晃義	9
クロコノマチョウの採集記録	梅本晃義	9
2001年夏の成果	交告尚史	10
淡路島南部の蛾（1999）の訂正と追加	藤平 明	11
イシガケチョウの生態について	堀田 久	13
淡路島産昆虫類4100種を超える	登日邦明	14

淡 路 昆 虫 研 究 会

ENTOMOLOGICAL ASSOCIATION OF AWAJI
HYOGO JAPAN

March 2002



洲本市安乎町の蝶類とその変遷

堀田 久¹

はじめに

筆者が初めて蝶類の標本を作ったのは、1942年（中学2年生）の夏休みのことであり、その時のクロアゲハやルリタテハの標本は今も健在である。その後も昆虫に対する興味は変わらなかつたが、当時は第二次世界大戦の最中であったので、本格的な標本づくりに取り組んだのは1946年の夏からである。その頃はまだ在学中で、春休みや夏休みの採集が主であったが、1948年の4月からは志筑の中学校に勤務することになり、年間を通じて観察や採集ができるようになった。1953年の4月から西宮市の中学校に勤務していたが、春休みや夏休みには島内でも採集や観察を行ってきた。そして、1970年の4月からは洲本市内の中学校に勤務することになり、その後は安乎町の自宅付近を中心として、淡路島内の昆虫調査を続けてきた。この間、環境や気候状況などの変化と共に、その姿を殆ど見かけなくなったものもあれば、南方系の蝶のように分布範囲を広げ、個体数を増しているものもある。

ここでは、筆者の観察結果や保存する標本に基づき、安乎町の自宅付近を中心として、これまでに記録した蝶類とその変遷について述べてみたいと思う。

セセリチョウ科

1. ミヤマセセリ *Erynnis montanus*

3月下旬から5月初旬にかけて、雑木林や山地の路傍で見られたが、もともと個体数が少なく、近年は見かけていない。

2. ホソバセセリ *Isoteinon lamprospilus*

6月から8月にかけて見られるが、個体数はあまり多くない。

3. キマダラセセリ *Potanthus flavus*

5月下旬から9月にかけて見られるが、個体数はあまり多くない。

4. コチヤバネセセリ *Thoressa varia*

4月から10月頃まで見られ、個体数も多い。

5. オオチャバネセセリ *Polytremis pellucida*

7月から9月にかけて見られるが、個体数はあまり多くない。

6. チャバネセセリ *Pelopidas mathias*

5月から10月頃まで見られるが、特に遅い記録としては1988年12月19日というのがある。（本誌No. 35）。

7. イチモンジセセリ *Parnara guttata*

5月から10月頃まで見られ、個体数も多い。幼虫はツトムシと呼ばれ、イネの害虫として昔からよく知られている。

アゲハチョウ科

1. ジャコウアゲハ *Atrophaneura alcinous*

春型は4月下旬から現れ、夏型は7月から見られるが、個体数は春型の方が多い。

2. アオスジアゲハ *Graphium sarpedon*

春型は4月下旬から、夏型は6月下旬から見られるが、個体数はあまり多くない。

3. キアゲハ *Papilio machaon*

春型は4月から、夏型は6月から現れ、畑のバセリやニンジンに幼虫が見られる。

4. アゲハ *Papilio xuthus*

春型は3月下旬から、夏型は6月から現れて、10月頃まで見られる。

5. クロアゲハ *Papilio protenor*

春型は4月から、夏型は6月から現れて9月まで見られる。

6. ナガサキアゲハ *Papilio memnon*

1958年7月27日に、自宅横のミカン畠で雌を採集したが、これは、淡路島での初記録から7年目のことであり、島内における2回目の採集記録となった。1970年頃には、年にによって発生の個体数に大きな差があり、確認できたのは夏型だけであった。1980年の5月には、上記のミカン畠で新鮮な雄を採集し、その後は越冬蛹も確認して、毎年春型も多数見られるようになった。なお、成虫の見られる期間も長くなり、最も早い記録は1998年4月24日（雄）で、最も遅い記録は1997年11月13日（雌）である。

7. モンキアゲハ *Papilio helenus*

春型は5月から現れ、夏型は7月から現れる。1940年代には希少な種であったが、次第に個体数を増し、特に6月上旬にはサツキの花に、7月下旬にはオニユリの花に集まって、乱舞する姿も見られる。

8. カラスアゲハ *Papilio bianor*

春型は4月下旬から、夏型は7月中旬から現れるが、個体数はあまり多くない。

9. ミヤマカラスアゲハ *Papilio maackii*

安平町で最初に採集したのは1973年9月23日のことであり（本誌No. 11）、その後1996年6月（夏型雌）と、1998年5月（春型雌）に新鮮な個体を採集している（本誌No. 48）。

シロチョウ科

1. キチョウ *Eurema hecabe*

5月に春型が出現して、その後数回の発生を繰り返し12月になっても成虫が見られる。越冬個体は、真冬でも暖かい日には飛翔することがある。

2. ツマグロキチョウ *Eurema laeta*

1970年9月10日に採集したが、その後は見ていない。

3. モンキチョウ *Colias erate*

成虫は2月中旬から11月にかけて見られるが、暖かい年には下記のように飛翔活動を確認している。1995年12月31日（1雌）、1996年1月2日（1雌）、1996年1月6日（1雌）。

4. ツマキチョウ *Anthocharis scolytmus*

3月下旬から5月上旬にかけて出現する。近年個体数は減少しているが、それでも1日に数頭目撃することもある。

5. モンシロチョウ *Pieris rapae*

これまで最も早い初見日は1989年2月12日（1雄）で、この年の発生状況を観察した結果、4月上旬が第1化の最盛期で、5月中旬第2化、6月下旬第3化、7月下旬第4化、8月下旬第5化、10月上旬第6化と、年6回の発生を確認した。

6. スジグロシロチョウ *Pieris melete*

3月下旬から出現し、10月まで見られるが、個体数はあまり多くない。

シジミチョウ科

1. ムラサキシジミ *Narathura japonica*

1950年代には普通種であり、筆者宅の生垣（ウバメガシとアラカシが多い）にも見られ

たが、1970年頃から見られなくなっていた。それが、10年ほど前から時々見られるようになり、特に昨年（2000年）は個体数が多く、12月20日になっても活動しているのが見られた。

2. アカシジミ *Japonica lutea*

安平町で本種を採集したのは1983年6月のことであるが、その後は自宅付近でも、5月中旬から6月中旬にかけてよく見られるようになった。今年（2001年）の6月上旬から中旬にかけて、午後6時前後に、大きいクヌギの樹上で十数頭が乱舞するのを確認している。

3. ウラナミアカシジミ *Japonica saepestriata*

1970年代には個体数が多く、6月の朝方には筆者宅の庭先を飛ぶことも珍しくなかった。1972年の6月下旬には、夜間クヌギの枝の狭い範囲に、5頭が静止しているのを見たこともある。1980年代に入ってからは見られなくなっていたが、昨年（2000年）6月16日に、やっと1頭だけ確認することができた。

4. ミズイロオナガシジミ *Antigius attilia*

前種と同様に1970年代には個体数が多かったが、1980年以降は見られなかつた。それが昨年（2000年）6月16日に、1頭だけ確認することができた。

5. ミドリシジミ *Neozephyrus japonicus*

成虫は6月上旬から下旬にかけて見られる。1973年5月には安平町の中田や平安浦のハノキ林で、多数の幼虫を取り飼育した（本誌No. 10）。その年は成虫も多かつたが、翌年からは少なくなり、数年後には見られなくなった。

6. オオミドリシジミ *Favonius orientalis*

1951年6月10日に、安平町平安浦で雄1頭を採集しただけである。

7. トラフシジミ *Rapala arata*

1990年5月1日に、自宅の花畠で雄1頭を採集しただけである。

8. ベニシジミ *Lycaena phlaeas*

成虫が見られるのは、普通の年で2月下旬から12月初旬であるが、暖かい年には12月末から1月になんでも活動している。

9. ウラナミシジミ *Lampides boeticus*

7月から成虫が見られ、12月下旬まで活動していることが多い。越冬を確認したことはないが、1998年1月2日に活動するのを見ている。

10. ヤマトシジミ *Pseudozizeeria maha*

12月から1月にかけては、晩秋に羽化した個体が見られ、2月には羽化直後の個体を確認している。したがって、成虫は年中見られることになる。

11. シルビアシジミ *Zizina otis*

あまり注意して観察しなかつたこともあるが、1976年以降は成虫を見かけなかつた。1998年4月19日に、自宅近くにある田の畔のミヤコグサの群落で、多数の本種を確認した（本誌No. 47）。その後も少ないながら生息を確認している。

12. ルリシジミ *Celastrina argiolus*

成虫は3月から10月頃まで見られる。

13. ツバメシジミ *Everes argiades*

成虫は3月下旬から10月にかけて見られる。

14. ウラギンシジミ *Curetis acuta*

第1化は6月から、第2化は9月頃から現れる。越冬した個体は4月頃まで見られる。

テングチョウ科

1. テングチョウ *Libythea celtis*

5月下旬から羽化し始め、6月には個体数が多くなる。越冬した個体は3月頃から5月の初め頃まで見られる。

マダラチョウ科

1. アサギマダラ *Parantica sita*

たまに見られる程度で、全く見られない年もある。

タテハチョウ科

1. ウラギンスジヒョウモン *Argyronome laodice*

1950年代には、安乎町平安浦の山麓にある他の堤防で、6月ごろ多くの個体が見られたが、1970年以降は草原が荒廃して、全く見られなくなった。

2. ミドリヒョウモン *Argynnис paphia*

5月末から現れて花にも来るが、真夏には見られず9月に再び活動する。

3. クモガタヒョウモン *Nephargynnis anadyomene*

1974年9月20日に、雄を1頭採集しただけである。

4. メスグロヒョウモン *Damora sagana*

6月に出現して夏眠の後、9月から10月に活動する。秋には雌がよく見られたが、ここ数年は見ていない。

5. オオウラギンヒョウモン *Fabriciana nerippe*

ウラギンスジヒョウモンと同様に、1950年代には平安浦の池の堤防で、6月下旬頃多くの個体が見られたが、1970年以降は全く見られなくなった。

6. ツマグロヒョウモン *Argyreus hyperbius*

4月から9月にかけて見られ、1950年代に比べるとずいぶん多くなった。本種の幼虫は他のヒョウモン類と違って、パンジーなどの園芸用のスマレにもつく。

7. コミスジ *Neptis sappho*

4月から10月頃まで現れ、他のチョウが少なくなる真夏でもよく見かける。

8. キタテハ *Polygonia c-aureum*

第1化の成虫は6月上旬から現れ、数回の発生を繰り返して11月まで見られる。3月から4月には越冬した個体が見られる。

9. ルリタテハ *Kaniska canace*

第1化の成虫は6月から現れ、年3回ほどの発生で10月頃まで見られるが、あまり多くない。3月から4月には越冬個体が見られる。

10. ヒオドシチョウ *Nymphalis xanthomelas*

1950年代には見かけたことがあったが、その後は全く見ていない。

11. ヒメアカタテハ *Cynthia cardui*

1950年代には少なかったが、次第に個体数が多くなり、暖かい年には成虫越冬も見られるようになった。(本誌No. 44)

12. アカタテハ *Vanessa indica*

第1化の成虫は5月下旬から現れ、数回の発生を繰り返して10月頃まで見られる。越冬個体は、暖かい日には真冬でも飛翔し、5月頃まで見られる。

13. イシガケチョウ *Cyrestis thyodamas*

安乎町で最初に採集されたのは、1984年9月のことであるが(本誌No. 31)、筆者が最初に確認したのは1996年8月18日のことで、その後は時々見かけるようになった。昨年

(2000年)の11月26日には自宅の近くで、吸蜜活動中の本種を確認している。

14. コムラサキ *Apatura metis*

1992年6月に自宅の庭で雄を目撃し、1993年の6月に雌を採集したのが、安平町における最初の記録である(本誌No.38, 39)。その後は毎年のように発生を確認しているが、個体数は年によって大きな差が見られる。

15. ゴマダラチョウ *Hestina persimilis*

自宅の横に大きなエノキがあり、成虫は5月から8月にかけて見られるが少ない。

ジャノメチョウ科

1. ヒメウラナミジャノメ *Ypthima argus*

3月下旬から9月末にかけて見られ、個体数も多い。

2. ジャノメチョウ *Minois dryas*

6月中旬から9月にかけて見られ、個体数も多い。もともと少ない方ではなかったが、1980年頃から特に数が多くなったようである。これは、ススキの草原が多くなったことと関係があると思われる。

3. ヒカゲチョウ *Lethe sicelis*

5月から10月まで見られ、個体数も多い。

4. サトキマダラヒカゲ *Neope goschkevitschii*

第1化は3月末から6月初旬にかけて現れ、個体数も多い。第2化は7月から8月にかけて見られる。

5. ヒメジャノメ *Mycalesis gotama*

5月末から10月にかけて見られる。

6. コジャノメ *Mycalesis francisca*

5月から9月にかけて見られる。

7. ウスイロコノマチョウ *Melanitis leda*

1998年10月28日に、自宅近くで雄を採集しただけである(本誌No.48)。

8. クロコノマチョウ *Melanitis phedima*

安平町で最初に採集したのは、1989年8月(本誌No.36)のことである。その後は次第に個体数も多くなつた。夏型は6月下旬から現れ、秋型は9月ごろから12月まで見られる。3月から4月には越冬した秋型がよく見られる。

メンガタメクラガメの採集記録

堀田 久

メンガタメクラガメ *Euryystylus coelestialium* の淡路島における採集記録は、これまでのところ少ないのであるが、筆者は下記のように本種を採集したので、報告しておきたい。

1. 採集年月日 2000年8月1日 1ex.

2. 採集地 洲本市安平町北谷

なお、採集した個体は、タラノキの花上に止まっていたものであり、標本は筆者が保管している。

(ほりたひさし)

「淡路花博」における害虫進入警戒調査について

藤富 正昭²

はじめに

2000年3月18日から9月17日までの6ヶ月間にわたり、淡路島北部の東浦町・淡路町を舞台に国際造園・園芸博覧会「ジャパンフローラ2000(愛称: 淡路花博)」が開催された。

阪神・淡路の震災復興、明石架橋開通記念、ガーデニングブームの高揚など様々な目的で開催され、多くの入場者があった。

私を含め9名の昆虫担当の県職員が、輸入花き・草木類とその土壌・資材等に付着して侵入が警戒されている害虫調査を実施した。目に見えない博覧会の裏方業務の結果を、簡単にまとめ記録しておく。

調査内容

通常の植物検疫は、港湾や空港等で農林水産省植物防疫所が行う業務である。多量の輸入植物を用いた博覧会等の検疫業務は防疫所にとって予期せぬ業務となり、実施主体の兵庫県や花博協会と共同で調査を行うこととなった。私も県の一員として参画し、博覧会場付近に設置したライトトラップ(以下「LT」と記載)捕獲虫の種名調査を担当した。

調査は輸入植物が淡路に搬入され始めて間もない3月12日からスタートし、博覧会終了1ヶ月後の10月17日まで続けられた。

チュウカイミバエやコドリンガやアリモドキゾウムシなどの重要侵入警戒害虫の調査は、主として植物防疫所が担当し、誘引剤トラップや落とし穴トラップで調査が行われた。このトラップは、会場内外の来場者の目に付きにくい場所に設置された。

私たちの調査は、淡路町のストックヤード(植替え用の苗などの一時滞留場所)に設置した60Wの白熱電球を光源とするLT(誘蛾灯)に誘殺される昆虫の種別調査である。誘殺虫の採集間隔は原則として7日毎で、このLTは、日別自動採集装置であり、日別に種名調査を実施した。

結果

1. 月別誘殺虫数と分類された目及び科

3月12日から点灯したLTに誘引され、捕獲した昆虫総数は、7ヶ月間で8,360匹であり、カメムシ目が最も多く全体の35%を占めた。次いで、ハチ目、ハエ目、コウチュウ目、チョウ目の順で捕獲された。その他、バッタ目、シロアリ目、アミメカゲロウ目、トビケラ目、トンボ目がわずかに捕獲できた(図1)。

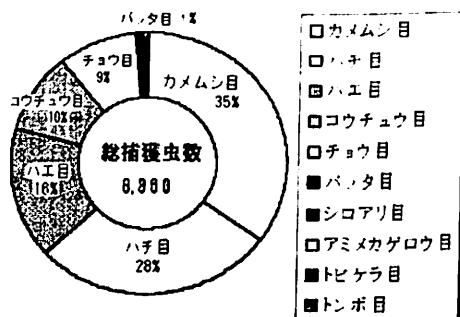


図1 ライトトラップ目別捕獲割合

(60W 白熱灯, 200/3/12~10/17, 淡路町)

月別に捕獲数を見ると、7月に総捕獲虫数の約半数の4,093匹が捕獲され、次いで、6月と9月が多く1,000匹を上まわった(図2)。そのため、7月の分類調査には、1日分当たり、2~3時間要した。

2: 〒675-0009 加古川市神野町西条 985

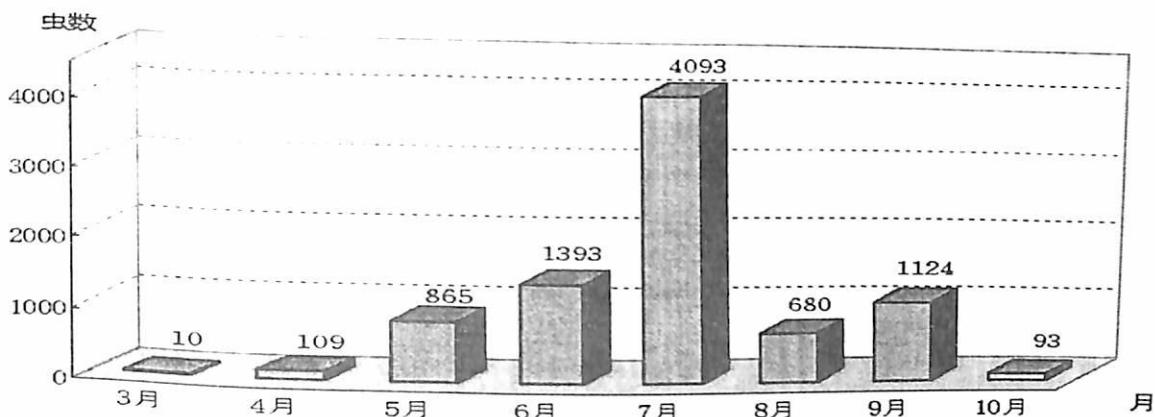


図2 ライトトラップ月別捕獲虫数

科別分類で見ると、カメムシ目では、ヨコバイ類、ウンカ類、カスミカメムシ科（以前はメクラカメムシ科と呼称されていた）、カメムシ科が多く、コウチュウ目では、コガネムシ科、チョウ目では、メイガ科などが多数捕獲された（表1）。

目	科	虫数	目	科	虫数	目	科	虫数
チョウ目	メイガ科	178	コウチュウ目	コガネムシ科	234	カメムシ目	カスミカメムシ科	274
	ヤガ科	86		ゴミムシ科	113		カメムシ科	202
	ハシキガ科	54		コメツキムシ科	85		ナガカメムシ科	138
	シャクガ科	45		ガムシ科	70		アブラムシ科	110
	スガ科	16		ハネカクシ科	41		ツチカメムシ科	42
	ヒトリガ科	7		テントウムシ科	24		マルカメムシ科	36
	トクガ科	6		ハムシ科	19		カタビロアメンボ科	13
	イラガ科	2		ゲンゴロウ科	3		ヘリカメムシ科	11
	ヒメハマキガ科	2		ゾウムシ科	3		サシガメ科	10
	イボタガ科	1		コクヌスト科	2		キジラミ科	7
	シャチホコガ科	1		カミキリムシ科	2		ハナカメムシ科	6
	カレハガ科	1		ジョウカイポン科	1		オオホシカムシ科	6
	ヒロズコガ科	1		テントウダマシ科	1		グンバイムシ科	4
	コウモリガ科	1		クチキムシ科	1		アオバハゴロモ科	3
	不明	1		カミキリモドキ科	1		マツモムシ科	3
		356		不明	252		アワフキムシ科	2
ハエ目	ユスリカ科	95					ハゴロモ科	1
	ミギワバエ科	13					ミズムシ科	1
	アブ科	13		アリ科	309		ヨコバイ類	676
	ショウジョウバエ科	9		コマユバチ科	41		ウンカ類	617
	ガガンボ科	4		ヒメバチ科	25		不明	743
	ハモリバエ科	4		スズメバチ科	1			
	キノコバエ科	3		不明	1979			
	ハナハエ科	3						
	チオウバエ科	3						
	ケハエ科	1						
	デガシラバエ科	1						
	ハナアブ科	1						
	カブト（ユスリカ科除く）	61						
	不明	61						
		1141						

* 「類」は分類学の用語ではないが、近似の科の集まりとして用いた。
 ** 捕獲数の多い順に並べた。

表1 ライトトラップ捕獲虫の目・科別分類

2. 種名が判別した昆虫名

目まではすべて判別することができたが、種名まで分類できたのは総捕獲数の10%程度であり、残りは不明虫として数のみ記録せざるをえなかった。予測されたことではあるが、LTの分類調査の困難さを実感させられた。この調査で種名のわかった昆虫は、カメムシ目28種、チョウ目24種、コウチュウ目17種、ハエ目およびハチ目各1種の計71種であった。種の判別が容易だったのは、イネの害虫としてよく知られたセジロウンカやトビイロウンカ、果樹害虫のツヤアオカメムシ、アブラナ科野菜の害虫コナガなどで、仕事柄慣れ親しんでいる害虫種が多かった。（表2）。

3. 侵入警戒調査

植物防疫所が、平成12年度「東海・近畿地区植物防疫協議会」(2000年10月)に提出した資料には、「平成12年3月18日から(中略)淡路島で開催された国際造園博(中略)については、(中略)合同で会期終了1ヶ月後まで侵入警戒調査を実施したが、ミカンコミバエ種群等の対象病害虫は発見されなかった。」とわずかに5行の記事が載せられ、博覧会に搬入された植物等から侵入害虫問題は起らなかつたとの見解が示されていた。

まとめ

先頃NHKのテレビ番組プロジェクトXで、「ウリミバエの撲滅作戦」が放映された。これは、一部の成功例に過ぎない。ほとんどは、日常の侵入警戒調査の網をくぐつて、招かざる客として日本国内へ入ってくる。その多くは人為的にもたらされ、日本の気候や環境に適応した種は、定着し分布を拡大することになる。

輸出入の増大・高速化・規制緩和に伴い、今後も侵入病害虫問題はますます常態化するであろう。農家にとっては由々しき問題であり、生態系の搅乱という環境問題も起きるであろう。

博覧会終了後1年余を経過し、淡路およびその周辺で新たな害虫発生問題が起きていないことが、担当した私にとって大きな救いである。貴重な体験をさせてくれた関係者と共に調査した仲間に感謝する。

目	種名	虫数	捕獲月・旬	目	種名	虫数	捕獲月・旬
チョウ目 (24種)	イボタガ	1	4 中	カメムシ目 (28種)	ツマグロヨコバイ	142	6 下~10 上
	シロシタヨトウ	1	4 下		イナヅマヨコバイ	18	5 下~9 下
	クロミキリガ	1	4 上		オオヨコバイ	6	7 下~9 中
	スジキリヨトウ	2	5 上		アオバハゴロモ	3	9 上~10 上
	オオタバコガ	1	6 下		セジロウンカ	168	6 上~9 中
	フタオビコヤガ	1	8 中		ヒメトビウンカ	30	7 下~9 中
	モンキクロノメイガ	3	8 下~9 上		ミツハシテングスケバ	1	9 上
	シロオビノメイガ	5	8 下~10 上		モンシロチビカスミカメ	23	5 上
	キシャチホコ	1	6 上		アカスジカスミカメ	11	6 上~7 下
	キアシドクガ	6	6 上		アカヒゲホソミドリカスミカメ	5	6 下~9 下
	タケカレハ	1	6 上		ナカグロカスミカメ	1	9 下
	ヒロヘリアオイラガ	1	6 中		コアオカスミカメ	11	8 下~9 中
	トビスピジナミシャク	2	3 中~4 上		マツヒョウタンカスミカメ	1	6 下
	チャオビコバネナミシャク	1	4 上		ホソハリカメムシ	4	7 中~8 上
	ナカオビカバナミシャク	1	4 上		クモヘリカメムシ	2	6 中~8 上
	エグリゾマエダシャク	4	4 下~5 下		オオモンシロナガカメムシ	1	8 中
	トビモンオオエダシャク	1	3 中		ウスイロナガカメムシ	1	4 上
	ハスオビエダシャク	3	3 下		オオホシカメムシ	6	7 中~9 中
	ホソバトガリエダシャク	1	4 上		マルカメムシ	36	4 下~10 中
	シバトガ	2	6 上~6 下		ツチカメムシ	32	7 上~9 中
	ニカメイガ	1	6 上		ツヤアオカメムシ	45	5 上~7 中
	モトキハマキ	1	6 中		アオクサカメムシ	21	5 中~8 上
	コナガ	15	6 上~8 中		チャバネアオカメムシ	30	5 下~8 中
	キマダラコウモリ	1	6 上		シラホンカメムシ	25	6 上~9 上
	計	56			ブチヒゲカメムシ	2	8 中~9 下
コウチュウ目 (17種)	ヒメガムシ	13	8 上~9 上		イチモンジカメムシ	7	6 中~9 上
	コイチヤコガネ	24	6 上~7 下		イネクロカメムシ	1	7 中
	クロコガネ	4	6 上~6 中		ウズラカメムシ	1	6 中
	セマダラコガネ	20	6 上~7 下	計	634		
	トウガネブイブイ	23	6 中~7 下	ハエ目 (1種)	ブトハチモドキバエ	1	7 上
	アオドウガネ	50	6 中~9 下	計	1		
	ヒメコガネ	2	7 上	ハチ目 (1種)	スズメハチ	1	8 上
	コガネムシ	1	6 下	計	1		
	コアオハナムグリ	2	7 下				
	ヒゲコメツキ	3	5 下~6 上				
	ヨツボシムナボソコメツキ	5	6 上				
	マグラチビコメツキ	2	8 中				
	サビキコリ	4	9 中~9 下				
	ナナホシテントウ	2	4 下~6 上				
	ナミテントウ	3	6 上~6 下				
	ヒメカメノコテントウ	11	6 上~9 中				
	カバイロコクヌスト	2	6 上				
	計	171					

表2 ライトトラップ捕獲虫の種名

(ふじとみまさあき)

捕獲虫のうち種名の判別した虫の割合
 $863 \div 8360 \times 100 = 10.3\%$

イシガケチョウの思い出

梅本 晃義³

1994年6月6日洲本市の大城池林道にて、生まれて初めてイシガケチョウ *Cyrestis thyodamas* を採集する。最初は蝶なのか蛾なのか解らず、イシガケチョウの飛んでいる所を見たことがない私には、何であるか解らないままに、とにかく探ってみるのが先決だと思い必死で追いかけた。不規則に飛ぶものだからなかなか捕らえられず、やっとの思いで網に入ったときはふうふう息を切らしながら喜びをかみしめた。

その後のイシガケチョウの採集記録を報告したい。

1♂ 1994年6月6日, 2♂ 6月7日.

1♂ 1995年6月5日, 2♂ 6月7日.

1♂ 1996年6月10日.

3♂ 1997年6月9日, 1♂ 6月14日.

4♂ 1998年5月31日.

これらは全て鮎屋ダムの上流、大城池にてである。なぜか夏型の雄ばかりである。

コムラサキの採集記録

梅本 晃義

コムラサキ *Apatura metis* は鳥や獣の糞に群生する習性があるようだ。島内においてはそのような状態は今まで見たことがない。個体数も少ないように思うので、採集記録を報告しておく。

1. 洲市民民球場内 1♂, 1992年7月30日.
2. 柏原山頂 1♂, 1993年8月3日.
3. 洲本市炬口のやしまの上の林道 1♂, 1994年8月2日.
4. 五色町西泉寺（取り逃がす） 1♂, 2000年10月4日.

クロコノマチョウの採集記録

梅本 晃義

クロコノマチョウ *Melanitis leda* を採集したので以下に報告する。

1. 洲本市柏原山頂滝水寺の境内 1♀(夏型), 1992年7月12日.
2. 洲本市大城池の奥のキャンプ場 2♀(夏型), 1994年7月13日.
3. 洲本市炬口やしまの上の林道 1♂(夏型), 1995年7月18日.
4. 五色町鮎原小学校の裏山 1♀(夏型), 2000年9月18日.
5. 洲本市山武牧場跡 1♂(夏型), 1997年7月20日.
6. 洲本市竹原ダムの下の桜並木 3♂(夏型), 1992年7月12日.
7. 三原町初尾ダム 1♀(夏型), 1990年7月11日.

(うめもと あきよし)

2001年夏の成果

交告 尚史⁴

妻の実家が洲本にある関係で、毎年お盆前後の数日間を淡路島で過ごす。今年は7日から11日まで滞在した。神戸に住んでいたころは淡路島の夏は過ごしやすいと思っていたが、少なくともここ2年は酷暑で、とくに今年の暑さはすさまじかった。雨もずいぶん長いこと降らなかつたようである。

洲本を訪れると、まずは近くのおきまりのコースを歩く。塩屋から宇山を抜け、石が谷で山中に入り、厚浜の集落に出る。今年も8日にこのコースを辿ってみたが、ハチ以外の昆虫にはほとんどお目にかかるなかつた。石が谷の山の入り際でナミアゲハを一頭、それから厚浜の田圃道を国道28号線の方へ下る道すがら、少し山に入った林道でウラギンシジミの雄を一頭発見した。これがこの日の収穫のすべてである。いずれもスウェーデンの知人への贈物にすることにした。スウェーデンではアゲハ類はキアゲハ（向こうでは学名どおりマカオンと呼ぶ。日本のキアゲハより少し色が薄く柔軟な印象）しかいない。ウラギンシジミは分布していない。

翌9日の午前中、大浜海岸の方からホテルの裏を三熊山に登った。昨年は八王子神社に向かう小径でアオバセセリがひらひらするのを見たが、今年はしっかりと目を凝らしても見つけられなかつた。山坂を登り切り、シロミノヤブムラサキの「檻」の処から西の丸方面に歩いていて、テングチョウに出くわした。さらにこの道を脱けた先の眺望の開けた処でまた一頭現われた。後で登日邦明氏に伺つたところでは、三熊山ではテングチョウの個体数は少ないそうである。ただし、西の丸方面では比較的よく観察できること、木造りのベンチなどが配された辺りをしばらく徘徊。夏にここに来れば必ず出会えるツマグロヒョウモンが今年もせわしく翔び回っていた。いつもならやり過ごすところだが、今回は先ほどのテングチョウとともにスウェーデン土産となつた。

その日の夕方、宮滝市民の森に出かけた。生憎の曇天で昆虫との出遭いはあまり期待できなかつたが、もしかするとと思って滝の横の林道中村線を少しばかり登つた。そして、昨年にも増して水量の乏しい渓流に降りてみた。そこは昨年オジロサナエの番を探集した処である。私が一息入れている間に、息子が樹上に飛來した小さなトンボを捕ろうとして失敗した。息子が語ってくれた印象から、それはやはりオジロサナエであったように思われてきた。そこで翌10日の午前中、もう一度同じ場所に足を運んだ。途中樹間に幾度もテングチョウを見た。この一帯にはたくさんいるようである。さて、11時ごろ、前日息子が捕りそこなつた木の傍で待ち受けていると、隣木の頂から、それと覺しきものが一頭地上1メートルあたりまで舞い降りてきた。まさしくオジロサナエであった。

オジロサナエは、渓流の全体を生息空間にしている昆虫である。川の上流で産まれた卵から孵化した幼虫が川を下り、下流で羽化した成虫は川沿いに山に登ると言われている（井上清・谷幸三「トンボのすべて」トンボ出版、1999年、97頁）。したがつて、この稀少なトンボを後世に残すには、水系の全体を保全して、彼らの生息環境を維持していく必要がある。宮滝市民の森の入り口付近では、人々が水に親しめるよう河岸や河道にかなり手が加えられているが、自然の改変に際しては他の生物に対するきめ細かな配慮を怠つてはならない。

（こうかつ ひさし）

4: 〒225 横浜市緑区黒須田 32-12 あざみ野 405

淡路島南部の蛾（1999）の訂正と追加

藤平 明⁵

- (1) 旧学名が多いので目下訂正中です。お許しください。
- (2) 次種は誤同定につき削除してください。

441 *Trichopteryx miracula* Inoue ウスミドリコバネナミシャク

- (3) 以下の種を追加します。（2001年10月現在、順不同）

1. *Homonopsis foederatana* Kennel ツヅリモンハマキ (p.73)
May.26.2000 (SS) [灯]
2. *Kawabeia razowskii* Kawabe ハイイロフユハマキ (p.78)
Mar..5.2000 (HG) [灯] Mar.,27.2000(SS) [灯]
3. *Hedya iophaea* Meyrick カタシロムラサキヒメハマキ (p.100)
Jun..4.1999 (SS) [灯]
4. *Hedya ignara* Falkovitsh ニセシロモンヒメハマキ
May.10.2001 (SS) [灯]
5. *Eucoenogenes ancyrota* Meyrick モッコクヒメハマキ (p.120)
May.8.1999 (SS) [灯]
6. *Gravitarmata margarotana* Heinemann マツトビヒメハマキ (p.131)
Apr.,21.1999 (HG) [灯]
7. *Rhopobota naevana* Hubner クロネハイイロヒメハマキ (p.140)
Dec.,4.1999 (SS) [灯]
8. *Grapholitha pallifrontaza* Zeller フタスジヒメハマキ (p.145)
Sep.,5.1999 (HG) [灯] 南系？
9. *Agonopterix issikii* Clarke コクサギヒラタマルハキバガ (p.247)
Apr.,20.1999 (HG) [灯]
10. *Casmara agronoma* Meyrick ホソバキホリマルハキバガ (p.251)
Jul.,4.1999 (HG) [灯]
11. *Calamotropha nigripunctella* Leech キスジツトガ (p.320)
Sep.,3.2000 (HG) [灯]
12. *Cotachena alysoni* Whalley クロスカシノメイガ (p.328)
May.8.1999, May.10.2001 (SS) [灯]
13. *Mabra charonialis* Walker ミツテンノメイガ (p.330)
Sep.,17.2000(OK)[灯]
14. *Agroterea posticalis* Wileman クロウスムラサキノメイガ (p.332)
May.27.2001 (HG) [灯]
15. *Antiercta ornatalis* Duponchel ナカオビノメイガ (p.334)
Oct.,12.1999 (SS) [灯]
16. *Hedylepta misera* Butler ヒメクロミスジノメイガ (p.340)
Jun..5.1996 (YZ) [灯]
17. *Glyphodes quadrimaculalis* Bremer & Grey ヨツボシノメイガ (p.346)
Jun.,29.2000 (SS) [灯]

5: 〒656-0541 三原郡南淡町阿万上町 794

*: (SS) →南淡町福良丙、環境庁メッシュ地図、5134-25-94.

(HG) →南淡町阿万東町、同 上、5134-26-30.

[灯] →灯火採集、(p.) →大図鑑Iの記載ページ。

18. *Prophantis octoguttalis* (Felder & Rogenhofer) ヤツボシノメイガ (p.350)
 Apr.,21.1999 (HG) [灯]
19. *Nymphula sinicalis* Hampson シナミズメイガ (p.370)
 Sep.,3.2000 (HG) [灯]
20. *Lipidogma atribasalis* Hampson ネグロフトイメイガ (p.372)
 Jul.,25.2001 (HG) [灯]
21. *Doloessa ochrociliella* Ragonot クロモンツヅリガ (p.375)
 Jun.,4.1999 (SS) [灯] 南系 九州～屋久島
22. *Samaria ardentella* Ragonot トビマダラメイガ (p.397)
 May,28.2001 (HG) [灯]
23. *Eurhodope heringii* Ragonot ギンマダラメイガ (p.398)
 Jun.,4.1999 (SS) [灯]
24. *Metriostola infausta* Ragonot シロスジクロマダラメイガ (p.399)
 Jun.,4.1999 (SS) [灯]
25. *Pseudalbara parvula* Leech ヒメハイイロカギバ (p.413)
 Jun.,12.2001 (YZ) [灯]
26. *Cilix filipjevi* Kardakoff ナカモンカギバ (p.417)
 Apr.,29.2000 (HG) [灯]
27. *Neoploca arctipennis* Butler マユミトガリバ (p.423)
 Apr.,5.1999 (SS) [灯] Apr.,10.2001 (HG) [灯]
28. *Inurois tenuis* Butler ホソウスバフュシャク (p.427)
 Mar.,14.1999 (HG) [灯]
29. *Jodis putata* Linnaeus ヒメウスアオシャク (p.433)
 May,21.1999 (HG) [灯]
30. *Scopula corrivalaria* Kretschmar ウラナミヒメシャク (p.448)
 May,8.1999 (SS) [灯]
31. *Acasis viretata* Hubner ルリオビナミシャク (p.462)
 Mar.,27.2000 (SS) [灯]
32. *Gandaritis agnes* Butler キガシラオオナミシャク (p.483)
 Jun.,12.2001 (YZ) [灯]
33. *Gymnoscelis subpumilata* Inoue ホソバチビナミシャク (p.513)
 Sep.,3.2000 (SS) [灯]
34. *Euryobeidia languidata* Walker シロジマエダシャク (p.534)
 Jun.,4.1999 (SS) [灯]
35. *Wilemania nitobei* Nitobe ニトベエダシャク (p.557)
 Dec.,4.1999 (SS) [灯]
36. *Hyperapeira parva* Hedemann コガタイチモジエダシャク (p.567)
 Oct.,12.1999 (SS) [灯]
37. *Parepione grata* Butler ウラモンアカエダシャク (p.571)
 Aug.,15.2001 (HG) [灯]
38. *Viminia digna* Butler クビグロケンモン (p.679)
 Sep.,17.2001 (HG) [灯]
39. *Orthosia nigromaculata* Hone カギモンキリガ (p.710)
 Apr.,25. 2001 (YZ) [灯] May,10.2001 (SS) [灯]
40. *Eupsilia quadrilinea* Leech ヨスジノコメキリガ (p.730)

- Mar..5.2000 (HG) [灯]
41. *Sapporia repetita* Butler サッポロチャイロヨトウ (p.744)
May.21.1999 (HG) [灯]
42. *Callopistria albolineola* Graeser シロスジツマキリヨトウ (p.786)
Oct..15.2000 (HG) [灯]
43. *Nycteola costalis* Sugi マエシロモンキノカワガ (p.795)
Apr..2.2000 (HG) [灯] Sep..17.2000 (OK) [灯]
44. *Corgatha pygmaea* Wileman ベニシマコヤガ (p.804)
Sep..3.2000 (SS) [灯]
45. *Amyna* sp.
Sep..17.2001 (HG) [灯]
46. *Catocala streckeri* Staudinger アサマキシタバ (p.842)
May.29.2000, May.27.2001 (HG) [灯]
47. *Wilemaniella angulata* Wileman ヒメエグリアツバ (p.880)
Jun..29.2000 (SS) [灯]
48. *Anatatha lignea* Butler ナミグルマアツバ (p.882)
Jun..4.1999 (SS) [灯]
49. *Homodes vivida* Guenée ニジオビベニアツバ (p.887)
Nov..8.1999 (SS) [灯] May.29.2000, Jul..17.2000 (HG) [灯] Sep..17.2000 (OK) [灯]
南方系で珍しい。兵庫県初記録。
50. *Mimachrostia fasciata* Sugi ウスオビチビアツバ (p.892)
Oct..4.1999 (HG) [灯]
51. *Rivula* sp.
May.10.2001 (SS) [灯]
52. *Luceria fletcheri* Inoue チビアツバ (p.900)
May.21.1999 (HG) [灯] Oct..19.2000 (OK) [灯]

(ふじひら あきら)

イシガケチョウの生態について 堀田 久¹

イシガケチョウ *Cyrestis thyodamas* は、淡路島の各地に分布を広げ個体数も増加しているが、淡路島における本種の生態については、ほとんど記録は見られないので、筆者の観察記録を報告しておきたい。

1. 2000年11月26日

洲本市安平町北谷の筆者宅近くで、ビワの花で吸蜜中の本種を3頭目撲し、1♂を採集した。本種は成虫で越冬するので、晩秋に見られても不思議ではないが、11月下旬の吸蜜活動は珍しいと思う。

2. 2001年4月2日

洲本市安平町の筆者宅付近で、越冬したイシガケチョウがツバキの花で吸蜜しているのを目撲したが、その個体はやがてアンズの花へ移動して吸蜜活動を続けていた。なお、同年の3月26日には越冬したイシガケチョウが、筆者宅付近で飛んでいるのを目撲したが、これは筆者としては、淡路島における最も早い目撲記録である。

(ほりた ひさし)

淡路島産昆虫類 4100 種を超える

登日邦明

1966 年の設立以来、本誌に掲載された報文は 300 編を超え、他の文献上に記録された種や、ここ 10 数年来、事務局と同じくするネイチャー・アソシエイション自然環境研究所 (NSI) の独自の調査で明らかになった種を加えると、2002 年 2 月現在で淡路島から記録された昆虫類は 4164 種となった (別表参照)。

これらの詳細については、いずれ総目録の形で纏めたいと考えているが、とりあえず現時点での概況として記録しておきたい。

目名	科数	種数	(%)	目名	科数	種数	(%)
トビムシ	5	5	0.12	アザミウマ	2	7	0/17
イシノミ	1	2	0/05	カメムシ	33	201	4.83
シミ	1	2	0.05	セミ	38	187	4.49
カゲロウ	7	21	0.50	アミメカゲロウ	11	37	0.89
トンボ	9	75	1.80	コウチュウ	81	1122	26.95
カワゲラ	4	13	0.31	ネジレバネ	2	2	0.05
ゴキブリ	3	8	0.19	ハチ	46	634	15.23
カマキリ	2	7	0.17	シリアゲムシ	2	2	0.05
シロアリ	1	1	0.02	ハエ	59	391	9.39
バッタ	16	110	2.64	トビケラ	13	27	0.65
ナナフシ	1	5	0.12	チョウ	61	1272	30.55
ハサミムシ	4	7	0.17	(チョウ類)	9	81	1.95
チャタテムシ	11	26	0.62	(ガ類)	52	1191	28.60
				24 目	413 科	4164 種	

200 年 2 月 10 日現在 NSI 調べ

(とび くにあき)

編集後記

- ▽ 創立以来、多くの方々に支えられ、発行を続けてきた本誌ですが、諸般の事情により、今号をもつて休刊とさせていただきます。
- ▽ しかし、研究会としての組織は残し、かつて発行していた連絡誌「INSECT」の復刊や、本誌 No.1 ~50 の総目次の発行なども予定しています。
- ▽ また、これまで本誌に寄稿いただいた報文等は、NSI の「Awajiensis」の枠を拡大して収載する予定で、会員の方々には今後「Aw」をお送りすることになります。
- ▽ 上記のように活動形態が変わりますが、これからも淡路島の昆虫相解明に向けて、さらには淡路島の自然史解明に向けて、ご支援とご鞭撻をお願いします。

(TB)

